



勢陽雜記

四

一志郡

川口
中道
須州
小津
須川
肥留
烏

壱水
藤方
森
雲出
白石

特別
N 4
4912
4



特
門 九
號 4912
卷 4

玄水 一志部
藤方 小森上野
小木



雲出 本郷 嶋貫 長常 十五所
長藤 伊倉津 高峯
矢野 小玄

木造 新家岸橋 長持 牧川方

野邊 小戸木 戸木 七栗郷 庄田 中川原 入田

七栗郷 森 加村 七栗郷 中村 上津前 七栗郷 一色 上垣内 七栗郷 大鳥

多野田

燧田

神原

下村中村平生上村

小俣郷 三ヶ野

小俣郷 谷杓

小俣郷 佐田

小俣郷 上村

小俣郷 入道垣内

小俣郷 稻垣

小俣郷 右市

小俣郷 南出

中村

毘村

小俣郷 大村

小俣郷 大仰

石橋

其倉

井生

河口世古

山尾田 御番

小野 並木

上野

等所

出湯田

馬場

南家城

北家城

八對野

山田野

藤村

二俣

真見

大原

小杓

城立

福田山

竹原

持經園 中京茶

八平俣

梅ヶ平尾 宿平尾

若ヶ野 服ヶ野

大河内 籠本

八知

浪測

大野

掃

新堂

小田

北津

小西

市場

大郷堂

老麻野

太市生

上村中村 下村 猿子

御嶽

杓平

石名原

興津

市場 大久保
上藤箱

川上

前原 寺
中野

丹生侯

上多氣

下多氣

下川

床庄 三谷
篠平尾

飯泉

フジ口

山口中湊

泰草

小川

小原

柚原

後山

飯福田

岩倉

与原

合ヶ野

矢下

宮野

滝ノ川

栗木

釜生田

井ノ上

八田

嵩田

小山

八太

波瀬

井関

田尻

高野

目置

庄村

其村

湊ヶ瀬

高橋

片野

平尾

宮右

天花寺

一志

堀之内

下ノ庄

小川

黒田

野田

見永

新屋庄ニハノヤ

河原木造

舞出マユデ

甚目シメ

湏川

湏川夷

星合

笠松

曾原

小船江

肥田

西肥田

小村

中林

中道

小津

津屋城

川北

湏可

權現前

湏ヶ領

田村

等所サシトコロ

小野

茶王寺

黒野

大阿坂オホアサカ

小阿坂

羨濃田

上ノ庄

中ノ庄

市場庄

久米

隨之奉

雲崎

雲ヶ島

今九石ト云

ト百三十三村 外小村七十八

高九萬五百六十石九斗三合

内 五萬八千二百石四斗九升九合 田方

外高九百六十九石四斗四合

新田

徳川徳川中四十六ヶ村

一四四十一村

徳川徳川中四十六ヶ村

徳川徳川中四十六ヶ村

徳川徳川中四十六ヶ村

一谷松柳永田村より伊外ら卯下村までの山路り
或里より半馬れ無路ありといふも難を越峯あり遠
とてとれありといふこの村も経路あり

一小俣一の坂より伊外あり村の山路り卯下里より
一小俣内村より伊外伊外路村の山路り卯下里より

一石巻村より伊外奥麻井一の山路り卯下里より

一福向山村より伊外奥方村の山路り卯下里より
山嶽の白根より谷口

下牛の石巻の山路り

一八部村の月山庵村より伊別より尾村への道一里二十何
様許より

一七高村より伊別より尾村のた一里十何河
細より

一六高村の内隈ヶ所より伊別布生村への道の河
上を島村より和別神楽村への道一里何

一松平村より和別神楽村への道一里何
河より

一丹波村より河邊谷赤柳村への道半島より
一嶽乃るお編乃りより一里何

一栗水作高 妙経 河上ノ橋廣木編織事と業と

一栗水山城ハウシエ 守。 里北中よりなる大り女名池者七
堂伽藍及坊屋十二宇と云々之を宗師と云々
河川流るる伊別ヶ所の時無く流車をめぐり將士比の
珍重を獻感のせらる所と云々宗師所せり云々
元是名酒と云々或は乃る寺領と云々返轉して
却るる名酒と云々と置れや云々
裏一里何ヶ所よりなる或時西の河邊の智と云々
浦一見のなる高岸より喜福ヶ所僧の智と云々
んとおしりぬる名酒と云々おしりぬる名酒の縁
云々一里何ヶ所よりなる高岸より喜福ヶ所僧の智と云々

昔より別り書しつる年十を事也は給ふ湯男の楚伯
と申す家形を絶つてあり終ふに家形村屋のおくこと
ありし隣地の四坊あり

一 石方村 はらふ森 御守たよりあやと少中書見りりよ中書あり
村中より石本の二坊なるあを一人まうり村の名あつたあか
たころこへまうあまも事も何もあけし村屋のちうらぬ
者もそりぬ人書をまうかとうけぬあ

早のころあつた所の名所へ所のあつたをえり
つる名へもあつたをえりあつたをえりあつたをえり
あつたをえりあつたをえりあつたをえりあつたをえり
右月形村中書見り終るあつたをえりあつたをえり
あつたをえりあつたをえりあつたをえりあつたをえり
あつたをえりあつたをえりあつたをえりあつたをえり

本造家中本分湯澤院松桂進送ふり

一本造 はらふ森 本造家屋形の四坊を村と書しそりあ
之一家中書と号し本分湯澤院松桂進送ふり
家後中書と号し本分湯澤院松桂進送ふり
村よりあつたをえりあつたをえりあつたをえり
一よりあつた

小島屋納言顯能勇正三位
頭俊 俊通 俊康 才大納言正三位應永廿出家

持康 才大納言正二位 教親 才大納言從二位
政宗 法名宗戒三木 右中將正四位文長四出家
四十二

後茂 三末九中將正二位 具康 朝臣 才大納言從二位
天交二出家三九 具政 九中將從四位正末晴具
三男天文廿三出家

具政 九中將從四位正末晴具
三男天文廿三出家

顯後七世孫俊持卿八羽之位中將贈具卿之嬖聲也
 女子多子男子あり一故一晴具之男と女子聲と
 して本途昔厚以具政と云ふ寸以具政に本腹のまじり
 別腹のまじり家勢と流して本途は依具康と云ふ
 してあまのしつねに父具政に流して三年村の
 ひびき三年の心算とてP字なる本途をこと三年本途
 家國のしつねに事と少島具美郷と本途具政の
 二女の連枝はまじりか的事の因に眼とるを命知る
 打まの事途て一言件而も源澤院と云者之
勝和と云は後深草の御守と云ふ事なり命なりけり成りて成後
 中條中村下り國領に居城に在る深澤院恩にふれり

同嫡子勲為尉 源澤院御守なり
 彼等或時世々の事と新流して老若のまじり
 織田信忠とて氏威と云者一命を命たりて持ては
 執りしめし以幕下りしと云ふ事途を本途と云ふ
 如のまじり事と我も新流して如く人と云流して
 本途依も流して一命を命たりて持ては
 國目と云者此境の御守と云ふ信忠と云
 本途を攻るる御守と云は評議所と云は信忠と云
 村の娘九の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 中田宮の御守と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
 只一のあまのまじりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

引つきのまはりの小舟を廻らざる事此のこゝろ利根今
陽に照らす事とさしこむみ涙となりし唯と
とて事世とてらん多きをる下とよむれん母あふるの
思ふこと又流石なるをよれの昔ゆたたりせをわける
まねんるを毎に廻るとなはるぬあふりり角くこと
て事ありとてふも流村のあやとての語とてい
あうらうゆりし紙をいつて廻るとつくとけい書をあふと
てさし事ありとて事なきし世計よけいられぬ事なき
ん多ゆり父母の心押さへてきておろしき事流村
ともかふる言は流石なりとて地の内とたては親をあふ
と海はさるごとくともた紙のあふるとてあふりり

打さられ秋山の夜長は甚治とて下勢あつたはは浪止
は流石世々橋成事とて終る事な流石の境村に
三つと小方の城田掃部助と名実流石一味をいふたや
とて政の御記やもたけ流石の名を護りたりとて

流石後木邊尾川中へ入る

三正十三甲申年流石に益去年とて及せ宮の隈とてあ
るの信札とて流石にこれたて野あつ内海とて流石とて
向しく果向も長津の嶽とて流石とてか人廻り
名ののこゝろよ如ゆとてことな流石の互書とて
高田とて流石 後たてとて 相守て居りたり
角く事ありとて代表とて事とて情ありとて高田と

氏郷の領よりなる多々の所より後乃門湊等の城へ
移居せしむる所知く城より約計を為す所小川の所人云
信太を為す所守りて信兼之所より別保と申城と
多知に京元より移居す所中尾内宛元清寺守り
柳を守固守を為す所又林の城を修り
て信兼の男とす多と入守りて移居す所柳と
惣年の守りての攻めを拒絶し東を去る所
と氏郷田丸中野野色川等より伏原を去る所
近寄所宮内川に流す所西へ柳を築城す所
小宮下河守所此分礼と申す所
かた柳と稱しを攻め流す所と云々

凡そ東へ渡りて京元より移居す所
手勢及びを去る所中尾内國へ防戦す所
きやとくを去る所一河守りて多と申す所川下と流
す所信兼の領の所好く一河守りて多と申す所
川の所水々んとす所小宮下河守りて多と申す所
あはれを去る所時を去る所一河守りて多と申す所
東一方へ移居す所一河守りて多と申す所
の陣ありて多と申す所一河守りて多と申す所
城守りて多と申す所一河守りて多と申す所
はうと申す所一河守りて多と申す所

このへ地方を築く所 藤原の所の 田中仁高知作を本懸念
十助申川の筑城を多うの 聲信重信高知作千治長 藤原
と城守を長向と一 張高子と勇吉其の居りよさ合
世帯とこれあれ者大 播磨と一 次と震一 けん寄
の毎度利を夫政居しと せんころ居りり此
時りをうらし 信高知作を本懸念の 終りり
お徳とんら時と せんお徳と 一 お徳と 一 播磨と
せんく氏弼と 一 せんくと 一 播磨と 一 田中仁高知作
信高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作
信高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作

此の地方の用と 藤原の所の 田中仁高知作を本懸念
お徳とんら時と せんお徳と 一 お徳と 一 播磨と
せんく氏弼と 一 せんくと 一 播磨と 一 田中仁高知作
信高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作
信高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作の 田中仁高知作

してふしこころをたやこころをいふもの共向し首飾をこら
 ト人勢陣へと掃れりつらりせしざりたり切中遊坊名
 町てふとて地味を削りしめたれたる武州府貝原庄西未流
 又切中を因りてひしひしとむすひたりたはしりて地味掃え
 一ト人助ケ度されなむらふかすしこの松次書といひと
 いふれぬ氏の侍下掃絶にころあさしつに地味をいひい
 ぬくし中川を冠しつらりししつにたかく戦ふ
 流し物と交りあつたせはさうらりり切中中尾川二人
 の首をすつさうてを掃りすまうし位と世帯ゆ
 志いおきひ流とて専らぬし切中川を冠りけり
 下人義一ゆつとせ切出柳とて元色けりし
 御い勢りのたれあつて殿いふふとのあはれま

中し本遊坊もさうしあふト人をついでしそは流し
 と周へゆつた其後とてあつて合戦といふ本遊の老臣大
 塚清とては元村色といふ村を掃りて切中流とて元色寺
 助とて切中流を掃りて戦死しつらりて後日切中流とて
 一掃しつらりて酒をすけりおしと一掃しつらりて流し
 とてお方流の和といふは飛舟しけりおき流し
 秀女和勝しつらりて十月より城と流しを
 依り流し流しを掃りて其後本遊名流也切中流
 流しとて流しとて流しとて流しとて流しとて流しとて
 十六層高年流しとて流しとて流しとて流しとて流しとて
 切中流とて流しとて流しとて流しとて流しとて流しとて

補遺記の時作年成賦して福島の事と云はるる
人心抱助と福島の事則は方と云はるる事とて
幾別とて二二と云はるる事と云はるる事とて
多行なく記す可し

一風平池はなむらたけ二里
十町なり横河村といふ編りのすまは海村といふ
川と云國信の記

此の池の遠きをりぬをせふ法と一志の増を云は
石の安法と一志の増と云はるる事とて今此
場は古水村の比あり古田倉村に豊草あり瑞穂
寺の内伊原村に依りて古有る事と見定むる

此の國の風事といふ事とて一志の増を云はるる

一志浦 志水海よりある事とて一志の増を云はるる

志水海の一志は海士のやまを名と云はるる事とて

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

一志の増と云はるる事とて一志の増を云はるる

このころに... 伊勢の海

一 伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

里の... 伊勢の海

少壮あり

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

伊勢の海 萬葉集 伊勢の海 萬葉集

他がやとさうしてさすは修るく感行は置れ候
のりな候いふらゆれはのちにおかしら上していつ
くつらなといふに急す者のもいさつら候へ
取しこゝに入敷くはさしつらゆのあらう山見れ置ぬの
すさしといふあうあがびてたさし—やられたる候も尋
おしつるありとあんかして修むの表具をき
あかぬ法持せし厚凡御どに引おすといふやそれ
形おそれのあらう治たて候の治の筋さを
さしつらすまはさしつらゆあらしし細のなれや
世の中まの事思ひしつらゆあらしのこおはに
中—あらしのまは—一治おられ候おめらるや

是處の爲も又つひより秋のま書あゆらるとい
人のいふは海津にゆれあゆれはの事始すんを
よ市上より海津ゆれ前上程あらしはれは精
細粉のおねをうけにたは候候の上つとてあらしは
さしつら細粉と具は字して食とてあらしは候
なぐらうたつとてあらしは書く実味ゆらつら
すらあのためとてあらしはさしつらあらしは
おねをうけにたは候候の上つとてあらしは
候
入成入西にたしつらひの事すしつら
かしつら海津の事あるといふまはらふまはらふすつら
あらし

此海を渡明命可斗神より紀あいのぬより
東少北に掛らす

一之渡 はらうあり船一里 小濱村と志保とのらなり

多治の地をさうりとは毛油松ら船のち橋より橋
り島よりりれ道を修築行かうんやうお龍を神あは
とらみまの村中へ移されたり又川野上流の家を
子あり下の名より争れむ巨舟や 然龍を親法を
事さうりらと

とらうりの中へ流る川門神あひのちやあるは

常蓮命

神國のち之流りの川と河取とのまじ

常蓮命

この川ののりしは神なる流のこし海と橋ああ

若田

多治紀よりく之流りの流より針ぬ遠めり海へ
むらり龍り人の体ひよこしへ遠き道をちあし
とて陸の千らとゆめりともきし初む所の秘秘のこよ
体もく心よりめあ事をもくゆをくPすため

渡口を船憩樹陰

漁村煙晴日汎々

寒潮帰去途裡逝

又有志瀉鷺巻

玉梨留冬は師伊勢の國へ陸の千をらよと流りしを
流るる心とそあ年より起くゆよ遠まこくわんしん
んこくられむき余よと命うてあをあしと結ゆ
あをこくくつて龍あつれと雲松く枕かすめり
鴨をのり伊勢紀又之流りとあ之陸千めとんこの流

よるしむるこの洲へくめんやぬの時をさして書送ると
西をりてう塩満洲の地をさしをらるるをえりてさき
さうく市場とまを流るあり塩子とさうひて流
のいふちとされむとらうとさるる

三流のいふこのらうら塩田ありあさむ河沿のさき
りあふ

一房原 海あり船に里は五里あり 水緑生と己年止

月一信をた國の目と和能し一うの初片茶をえ丸を
さるるう一うのぬと心も事信をさるるこの指白
の信をさるる如る信を指白指白今作して稀
と勘解りな金つをさるるさるる

割減する事とさるるさるる城と云はるる守
子と新金村等ゆ方を作るる家も水依
をわらうし終る高殿と指白とさるる信
の法率押さう攻殺の事教た方よりう指白
勘解りな金村もさるる高りたかかくし年善城
の自か一とさるる元是言事と國の信之法
と門卒してと成さる水依正とを寺と指白
と指白のさるるさるるさるるのん人さるる
とさるるさるるさるるさるる一回のさるる
歌家城をけんさるる指白の法率其村
二人と法率とく防殺のさるるさるる

新井を以て呼んで新井は新井といふ花守は新井の
城上は新井の城上と云ふ

上ノ新井と云ふ

天正十一年八月十日新井の領人新井を以て
新井を以て呼んで新井は新井といふ花守は新井の
城上は新井の城上と云ふ
新井の領人新井を以て呼んで新井は新井といふ
花守は新井の城上は新井の城上と云ふ
新井の領人新井を以て呼んで新井は新井といふ
花守は新井の城上は新井の城上と云ふ

新井の領人新井を以て呼んで新井は新井といふ
花守は新井の城上は新井の城上と云ふ
新井の領人新井を以て呼んで新井は新井といふ
花守は新井の城上は新井の城上と云ふ
新井の領人新井を以て呼んで新井は新井といふ
花守は新井の城上は新井の城上と云ふ

印田様情りておきりた方よる信孫三郎村吉向十郎
も有しそ印田様を悪くおぼすに御害一きりたは是れ
乃原元々の又或る悪く嫡子也
一 吾等 松原合兵の終へておきりた方 雲水巖の亭子
事あり

信確築本云々を記す 柳事

一 吾等 松原合兵の終へて 新書云々を記す 柳事
八度 長年田丸に備へて 信孫七世に備へて 信孫七世の細頭
の御子と築本云々を記す 柳事と柳原の書云々を記す
分り
山崎様からの源國水雲集に松原云々を記す 吾等の声と柳原

柳原の書云々を記す 柳事
分り

一 吾等 松原合兵の終へて 新書云々を記す 柳事
八度 長年田丸に備へて 信孫七世に備へて 信孫七世の細頭
の御子と築本云々を記す 柳事と柳原の書云々を記す
分り
山崎様からの源國水雲集に松原云々を記す 吾等の声と柳原
分り

七之流方をせしむる事ありしに
 倭者傳信之事も多し悪くも言れり信後傳
 と倭者を討殺しつる事ありしに
 言紙より信後をとりて言紙より
 高國より信後をとりて言紙より
 討殺しつる信後信存の事ありしに
 言紙より信後の事ありしに
 信後より信存の事ありしに
 白子本より信存の事ありしに
 信存感より信存の事ありしに

信存感より信存の事ありしに
 白子本より信存の事ありしに

信存感より信存の事ありしに
 白子本より信存の事ありしに
 信存感より信存の事ありしに
 白子本より信存の事ありしに

お林の母業らうに比へけんと云ふなり〜
多治ノド物〜の花の只小島島あり〜
あま〜(きん)あれゆき〜

一田村は南にあり 田村お平の廟あり 石塔あり
さつろを廟と申す 寺の城を築く所なり
らるとし 佐方と築き寺とて 佐方あり 寺あり
〜はの寺を築く所なり 寺あり 石の塔あり
その石塔あり 寺あり 寺あり 寺あり
を以て老婦とて 寺あり 寺あり 寺あり
田丸お〜と申す 寺あり 寺あり 寺あり

信水の親世音の縁起を同感なり 寺あり 寺あり
れよりよは 寺あり 寺あり 寺あり
同二年よは 寺あり 寺あり 寺あり
田丸お〜と申す 寺あり 寺あり 寺あり
一須賀村 寺あり 寺あり 寺あり
のんてん 寺あり 寺あり 寺あり
一太平山積り寺 寺あり 寺あり 寺あり
也併に利と海記と

延元元年有梵僧從定至魏州一志邪須可
聖皇立之第為設佛舍利燒香祀為恭敬法之
之河行遠國人物見佛舍利發心歸之於時魏州
有少部中私州之池即之宇後多其國曰村之
漢氏少與與披官之侍者而人玉須可聖梵僧之
紫菴因之無是西三之佛舍利長梵僧進之如來化已
二十余年乃其骨舍利非進之方室之虛國曰云延
慶昂有冥驗庶梵僧之冥驗名明也國曰云願法
師慈悲使祈冥驗者令得見梵僧云我祈冥
驗目前使見言訖祈冥驗一夜半聞鏗然有
声起視飾中五色鋪散而照十方梵僧人呼曰

果吾願矣 黎明進之國司與諸侍聚觀歎曰希世之
瑞也梵僧遂出佛舍利與多氣國司之汝常恭敬禮拜
於來世遊地獄苦生極樂言訖忽然飛空而去見之聞之
人深隨喜淚沾袂矣於此國司發志欲建梵宇十
彼柴庵之舊地命良工千人日久月深而落成國司
附齊田百石百費移西天之佛舍利号大平山積善
寺于時曆應三年庚辰二月七日謹莊嚴道場
集千衆誦諸經以伸供養誠哉聚沙為佛塔之戲
成善根何況於造立七堂伽藍之志乎自此貴賤咸
群諸心爰有伴勢山田天照太神之祢宜福為大吏
康永三年忽然死三日蘇之至閻魔王取見有瓦

人王問作何功德老人答曰唯參須可舍利十日王驚起
合掌讚言善哉參須可舍利當得生天是故國人之不
參須可之舍利於來世受國王之責吏舍利者法華序
品云殊利又見菩薩佛滅度後供養舍利又見佛子
造諸塔廟無數恒沙嚴飾國界宝塔高妙五千由旬
縱廣正等二千由旬一塔廟各千幢幡珠文露幔
宝鈴和鳴請天龍神人及非人香華伎樂常以供
養經云佛始於鹿野苑中為憍陳如等五人轉四
諦法輪住世四十九年後告迦葉吾以清淨法
眼涅槃妙心寶寶相微妙法門將付汝六人當
護持并勅阿難剖戴傳化無令斷絕統偈云

法本法無法無法法亦法也今付無法時法法何曾法即大磐
濕槃金棺從坐拳高七多羅樹化火三昧得舍利八斛四
斗又釋氏要覽云舍利此物乃戒定惠忍行功德堂成也
梵設利羅華骨身亦云馱都有二骨白色肉紅髮黑
色惟佛舍利五色有神變一切物不能壞焉六祖戒者即自
心中無非無鬼魅嫉妬無貪嗔無劫害名戒定者即觀諸善
惡境相自心不乱名定慧者自心無礙常以知惠觀照自
性不造諸惡雖修衆善心不執着敬上念下矜恤孤貧
名惠也若人行曠野途失道徑一心一意靜氣息舉
唱須可之舍利南無釈迦牟尼佛大悲之重心化為人像
亦具道路令得安穩乃至獲大善利消伏毒害也

後師の御奇り云々

花栗六日毎にうららかにあはれりては娘の老の言
亦かりに國の清平は位と云ふに御守り自書月
後々清平に虎をたしめりて

謹奉嚴命書當寺開基無外逸方大禪門
壽像竟見了本心無一星事生也無生死也無死
逸方御自贊

明應甲寅解制自當山往持比丘云虎書之

河原の神宮と云ふは河原の宮と云ふは
河原の神宮と云ふは河原の宮と云ふは
河原の神宮と云ふは河原の宮と云ふは
河原の神宮と云ふは河原の宮と云ふは

一少河坂

至河原西

宇礼志野

古長成神也

阿射神神座

並名

とあり乃て河坂の家、竜大明

神宮に神座山の御奇り

遷幸要畧密仁七年己酉夏四月十六日從鈴鹿山
遷座于河佐加藤方行樋官四年奉齋用是時介
阿佐加乃弥子尔坐而伴豆速布苗神百往人五十
人取死四十往人二十人取死如此伴豆速布苗時介
姪命遺中臣大鹿寓余伴勢大若子命已志部玉
携命奏聞天皇詔其国者大若子命先祖天目
別命所平山也大若子命祭平其神止詔賜種
々幣而返遺大若子命于時阿佐加乃山社作定

館之形もさういふにせよ、河原の中は
空を占む事し及ぶるに心同き先
ゆし先河原の城より城より先河原
悪河原の城より城より先河原
櫓も横心と下城下の陣形守成
して待つにさうも下城より先河原
とて攻めし城より城より先河原
を必達と河原より先河原の
よりさうも城より城より先河原
と先河原の城より城より先河原
と河原より城より先河原

遠るにけり攻め給ふ城中ついでに城より先河原
河原より城より先河原の城より先河原
右馬村の陣形もさういふにせよ、河原の中は
空を占む事し及ぶるに心同き先
ゆし先河原の城より城より先河原
悪河原の城より城より先河原
櫓も横心と下城下の陣形守成
して待つにさうも下城より先河原
とて攻めし城より城より先河原
を必達と河原より先河原の

三文 少島中納言源具光の御威を震へ
白く軍兵一子余騎を備へし御威を震へ
とて世中を御威を震へし御威を震へ
かたき軍兵一子余騎を備へし御威を震へ

志比を眺み幸ひつらふ事最もいとてさうに
 運りはくさうさうの申のまゝしりて
 申すゆれと御名物と申す此種類と申す
 申すことひがとく方れと申す事最も
 方れ民のいさめと申す事
 いふ世に命ふ時の活ゆや申す事
 一 神奈川 河内 神奈川 河内 神奈川 河内
 之先 神奈川 河内 神奈川 河内 神奈川 河内
 高村 河内 高村 河内 高村 河内
 紋 紋 紋
 神奈川 河内 神奈川 河内 神奈川 河内
 四形 河内 四形 河内 四形 河内

四形 河内 四形 河内 四形 河内

刑部物之為討文子、多氣國日流海城の信也と書すは腐
 本造具原屋の御守の書すは多氣國日流海城の信也と書すは腐
 介信兼、腐也、免飛多郎中山と云ふも、
 同右、先、二、更
 釋也、寺
 同右、京、道
 一 湯、石、門、社
 社人のまゝ、宮、後、門、名、の、志、ら、う、り、通、湯、之、出、産
 の、る、湯、後、石、門、社、の、志、ら、う、り、通、湯、之、出、産

用那惠上人云云如之及古御門院中二年殿下及元年
至政之以下細川政元富山義就作手御堂寺後
御之甚傳見別之御堂元年二月十日能修智西
寺寺遷化寺之本寺證元寺四戒國師西教中
興智得院南無真盛大上人

一 依田村中後軍師

淨光寺一十一人七卷竹盛寺

場寺 德也寺 多層寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 向來 寺寺 山 柳垣 備後野 小泉

寺寺 寺寺 寺寺

一 光耀山成徳寺

河内 河内 河内

小橋御用上村寺 寺寺

宗卷當國之寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺 寺寺

名港郡之竹人下甲北守ト云有信雄云々西事方
水沖島を可成のり奪せし多程不馬正七乙卯年
九月十七日一万余之軍出と年一四九と打三信繁
四の事あり自ら名港に在る中へ有る攻め不修
其國々流侍云々下侍直より決絶を以て防戦し
流方しに之あり難不ゆふあり利ありしあり攻め
事不叶信雄之妹あり怒り多し彼より甲北守を
擒して河津とてし其地を京をとりしをと捕り
と之の有り京をとりしが其地不とりしをと捕り
生捕り信雄を白くするも難し門にたり名港に
源方より秋の次は敵一もが部を以て年々されし

かゝるに難い事あり相つたる事あり其地は日直大勝元
松極ら其の尉殿を討て返り星り敵を以て身がたれん
西人教をせし一有難い事あり難し其地を馬よりとり
書きて出でりなり松極ら其の尉殿を討て返り星り
のころは是癡賊のころなり一務のあり討ておたり後
信忠と聞りしはふふ信雄の事あり也親國々
其安と云ふ先攻不國々其國々其國々其國々其國々
小款自其難し亦其地思ふ敵し小款亦其地思ふ
信繁其國々其國々其國々其國々其國々其國々其國々
其地其利と云ふ事あり也其地其地其地其地其地
其地其地其地其地其地其地其地其地其地其地其地

初は新治を討せり山中撤申して母を問ふ
けり有年を断て死せしむる事ありし未だ
死に由ありしが松平清元も斯くして台と
切て死する事あり

信州伊賀國長法寺事

天正九年己巳伊賀國信州長法寺に
如伊賀守武一の松平討つてけり後と
大指河守の當信雄とて其子孫ありし
り子孫産信なるにわがけり尚其後と
いふ事ありしに其子孫無くして其子孫
松平とのにけりわがけり尚其後と

松平に誠回出せり其子孫ありしに
のる信雄を死し其子孫ありしに
城を攻めし高直死す其子孫ありしに
害地ありしに其子孫ありしに
其子孫ありしに其子孫ありしに
軍を討つて其子孫ありしに
いふ事ありしに其子孫ありしに
まゝに其子孫ありしに

氏婦小保好向事

天正十二年甲申年小保好向は其子孫ありしに
其子孫ありしに其子孫ありしに

くろくふらふ其比つゝも遠征無純に極致し一三年城
を攻めしむるが三午に押して是は八月十常の備に
向ふに相付小侍の法名長命貴化也内也小
室孫作國勝齋上取凡門有身中其氣極極長村
との河左兵衛尉左衛門右衛門尉和留乃子乃監儀
儀左衛門尉四中左衛門尉同左水御田村乃介上
田左衛門介 小川平兵衛尉 中田之丞 安有将監
細野乃之丞尉尉尉 之丞 神田清盛尉尉中村左衛門
尉 一宮助五尉尉 梅原好方尉尉寺村平兵衛
尉 後解十常之備尉 卯池甚右衛門尉 日蓮寺
尉 園乃内等寺長傳 初令一子索先以依内之城

在九年一初に城中を以ての如く致さるに
御近方よりして相繼して世に解しつゝ和留乃
寺丸 是田甚三郎尉 池田樂治寺 初令一子
法名遠らるゝ 攻殺せしに城中に侍勤め尉に
信乃乃乃守城之當也 親命守城を用て遠征亦
向ふに城に攻められ城に攻められ攻められ
八角内保正尉 捕とるに其子方 遠征の事
能て之を治りしに 治小内御真依内 保正
攻に文政源兵衛尉 國持高寺 洗小攻のん寺
其長少島具親之伊賀國 女地系 再保大義太尉
を以て之 扱りしに 守城之 治小攻尉 尉

かひより守りまはる事とて七下不親法一りも當然と
甚也今之の事り不洋よるまをり守固々其修
習固の志より流法して流川流り行くとまをり
まをり其志固々まをりまをり其志固々まをり
と述

三 滝川を教とてゆくと持たしなり尚事の水はれぬ事と
なり此邪之の志をわたりあるやうとまをりまをり
まは揚歷の固、ゆてまをりまをりまをり
御不智一ゆりまをり

一 少少城村 ほく押 瀬戸の園の上 空 苗掛不
と云岩より芳流流ら(純也)固らると白く様現

を肩 タラシ 肩の事とて母教ふわら一始ては白流七下不
化して七下不化とて之小傳竹系無福回 山内也
八野野 井生 由不足止流七(信)ゆら人の初而小傳
社也とあるとて石を傳と首と一上人名曰法住也
跡於山林捨命於佛道而依有事縁下向能意固
く間常參詣氣多宮屢誦經典兩三年之后欲
歸去敢不克行今は是則明神を苗耳其後經數年
自明神而言我是伊勢國二志郡家城庄任人也余
梓之地季月稍久雖有帰帰臆在自爲之瑞若明
神宥縁在戎有入影向我本土以為利益衆生之
所守之七日七夜間祈請更在所應延有七日慙

皇祈請口新米鑿心失餘念第元日曉嶺嵐声
收溪月光閑于眩靈社排戶玉躰漸現光明赫々如
向朝日異香忽薰者入梅檀林夢哉非夢哉凡眼迷
難辨昂兩肩荷負早出門然間本社神人等恠事
躰尋跡追之聖人不能延去負御躰而卧地舌力
人踊背越者全不克足亦起漸行跡敵在佐間人
如是神變遂來臨當國其後序々名山嶽北首不
留至當山告曰我緣在此他出此可知衆生云云
一河上野付殿

河上野付殿の事
石大川廣別謀致教軍聖武天皇幸于河口

始之敗作哥或云相模國聖之甲斐與相模堺此類有云云

河上野の事
河上野の事

河上野の事
河上野の事

河上野の事
河上野の事

河上野の事
河上野の事

河上野の事
河上野の事

河上野の事
河上野の事

一曰鬼をたつといふ所を紀友雄討つたといふ所を
二曰四方と澤をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
三曰河野と澤をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
四曰二十余所をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
五曰十の屋敷をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
六曰家月の宮をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
七曰あしうらぶらぶをくくる所を紀友雄討つたといふ所を
八曰石の丸の村と田の丸の村をくくる所を紀友雄討つたといふ所を
九曰云世傳の古方有る天智帝之致臣に十方一云藤原役使
十方

四鬼所謂金鬼風鬼水鬼隱形鬼也在伊賀伊勢之間
不順王余於是勅紀友雄討十方友雄乃往詠和歌送之
久佐茂幾茂和可於保幾義能久余奈定波

伊豆久訶於余能須義可奈流部幾

諸鬼讀之感而散去十方失勢友雄終討滅之案十方
度未祥而俗説所傳亦多坂上田村丸討餘鹿山之鬼源
頼光与貞道未武公時保昌細等為山伏貞入大江山殺
酒麴童子又今渡部源立細擊羅生門鬼細又擊
擊平和及宇多赤鬼得其腕頼光獲友其首多田滿仲
斬信濃国戸隠山之鬼餘立將軍平維茂亦殺戸隠
山之鬼此之類世之所祢有年

と一曰く斗と云ふは水と云ふは火の各法を欲し多し一と云ふ
と云ふ其外徳陽子定東の定際を云ふことと云ふ
歳子と云ふ形雲視れ方也也古の中堂は遠く堂所深
遠堂外と云ふ在堂外と云ふして堂深堂外を領する
堂と云ふことと云ふあり丸一圓の形持たしことと云ふ
文年中の所濁と云ふことと云ふ教教を云ふことと云ふ
没之流の流より川の表徴して流接りしおるを
池内身信作と云ふことと云ふ正十一年の寺伝を云ふ事
寄進しと云ふ事其外ありと云ふことと云ふ繁榮を云ふ事
如く之れありありと云ふことと云ふそのと云ふ所を云ふ事
寺伝傳れと云ふことと云ふそのと云ふ事傳つて傳つて

其遠目と云ふことと云ふ其外と云ふ事海郷と云ふことと云ふあり
わりの器運と云ふことと云ふ其外と云ふ事家傳と云ふことと云ふ
歌等と云ふことと云ふ其外と云ふ事其外と云ふ事其外と云ふ事

多氣國司比來事

一多氣上下と云ふ村はらう八重山小島島代と云ふことと云ふ
ことと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
六十のり携ると十八回と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
河を渡り山泉池に水のを汲みおとすことと云ふ事と云ふ事
んと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
清の清と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
聖と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

實... 爲... 爲... 爲... 爲...
 爲... 爲... 爲... 爲... 爲...
 爲... 爲... 爲... 爲... 爲...
 爲... 爲... 爲... 爲... 爲...
 爲... 爲... 爲... 爲... 爲...

藤... 藤... 藤... 藤... 藤...
 藤... 藤... 藤... 藤... 藤...
 藤... 藤... 藤... 藤... 藤...

北畠家

村上天皇 具平親王 我家 師房
 雅實 久我大政大臣
法名蓮寛 雅定 中洗右大臣
 通親 右御門内大臣 通方 中洗家頭大
納言止二位
 仰親 大納言止三位
法名覺四 仰重 大納言止三位
法名經覚
 親房 大納言正一位
准后氏長者

中納言鎮守符將軍建武三丙子
 頭家 翌年建元二丁丑年正月舍第春日少將顯信朝臣共重從與攻
上逆忠戰於泉列女部野討死年七二

顯信 春日中納言爲與列國司後上洛而
屬征西將軍宮延元三年於鎮西討死
 顯泰 權大納言
正二位

顯房 堀河右大臣
六条右大臣

雅通 久我内大臣
 雅家 北畠家中洗通方
男中納言止二位

顯能 權大納言右大臣從一位
曆應元被任伊勢國司

滿雅 大納言

教具 權大納言從二位文明三年
三月廿三日四十九薨

政卿 從四位上元近衛中將元政具
元明十法名逸方

村親 元具方權大納言正三位永正八
出家四十四法名江号大右御所

晴具 元本元中將從四位下永祿
六法名大祐六十一元親

具教 權中納言正三位天正四十九法名
元覺於三瀬生害

信意 元中將天正三年改信雅

具親 南都東門院
天正四還俗

親顯 慶長八誕生實中院
通勝男

具政 木造家元中將從四位下
木造俊茂養子十九
天文二十二年出家

具藤 長野二郎

信雄 右中將實信長二男信意

式部大輔 實具親息

多氣國司者村上天皇十二代之後流中院乃一泉常
の故別養亦孫桐なるを先祖一品准大臣有朝臣之位
小島大納言入道源親房公後醍醐天皇より入て足利家
為氏に謀叛の比文武之道を以て忠義あり此故に古
中宮より改稱をすきり准后より宣旨を奉り
職系抄に撰い百官式目を定先其外書務を多々
ありしに情識を多才之商あり子顯家次男顯
信元又奥列の國司あり忠切を勅し二人元は依
右義死すを多々之男顯能卿始に伊勢國司に
任し多々上り世男に殿敷を地中を任し
より世多々多氣の國司と号しや若川より南
知しより伊賀伊勢之間より
收身合戦ありしに記名三十七年
院上流の時顯能の兵軍を承り伊賀伊勢の軍

吾之子奈彌を卒して父准后入道たり入洛る朝政
を一つ子とくわさるゝ亦明德三壬申年秋在帝新經
後其子大納言野恭卿後少輔院は父相續て壹
志飯高領野多氣度奪ふ都其外大和國宇治郡
那合六郡を領有し一軍共一万余人奈く大和と云
其後祿光院の清宇在永元九年大納言滿雅婦
足利家義持を討し謀叛之事を依り我持は
列六角家伊賀之仁本家大和の尚村越前守
久世滿而高直長野を林院関村戸家千孝より下
命して攻め圍司と要害を南伊勢より又
捕へて防ぐる世時阿飯の山と城擲を捕へ防戦
を方勢奪り足利政康と事とありて是
と送り是の法侍下知しては城擲を山
ありを司ありあり下幕をかよいて水を扱不
有紐し其道を防ぐ様し一平濱水ノ道毎より
ひくく人をもちせりうねり陣中是より難儀し既
は湯又のいなりと云ふ亦陣中は謀て擲の前より馬
をきて白糸を扱扱はぬてるを流し欺さる水
ありは是をとんて柳を山と云ふありて是を圍を
是いて返すあり其後將軍と圍司と和略ありて
事也應仁に至て細川勝元と山名宗全と挑り戦
洛中洛外と事と能事義視ハ潛りも京して多
氣圍司と事と事と南直と云ふなりと事と
將軍家譜云應仁元年五月洛中大乱八月義視竊

出京赴伊勢國依比畠前中納言源教具接待甚
厚新撰御所屢獻盃酒義視屢遊覽名山古寺過
浦邊觀海月詠倭歌相像京師以愁興社也同二
年四月應義政之招而放勢列贈短歌於教具教
具自返哥乃經丹生平尾五月到復可積善寺入木
造庄東明寺伊賀伊勢美濃國士等或獻馬或獻
危酒奉迎之美濃人世保氏不從命使教具改世保
城拔之為之清道既而到長野以畠山式部少輔為先
馳入室壽寺伊賀仁木某參謁到江列多羅尾時
京都諸大名使家族迎之乃登石山赴三井寺遂入洛
十月移居聖壽寺十一月為細川勝元被劫俄登比叡
山而天上路入山名宋金之陣以為一方主之
此年七十年三月有合戰四軍あり一は文明又年
二年合戦勝元と病死し其殘黨少く流石合戦
すといふ事い川とあり志向ありぬと云く小畠也
一は宋金合戦の事なり其族ありと云く小畠也
云々なりと云く河内内事なりと云く河内
御所内事なりと云く一子なり也其外波洲一志也
内事なりと云く本意なり是木ハ合又百人ハ云々
下事ハ中事なり之家合又百人の云々なり之
家ハ河内秋山芳野計之人ハ昔年云々侍又
下小畠家ハ与力也河内家幕紋露ハ凡云井内
一ハ云々秋山家幕ハ紋根一ハ云々大井家
幕ハ紋露凡云百ハ云々也河内家幕ハ四家合

ちん秋山鳥を危危 水音なき 寂能なる九代信意
卿之代に到りて君に義を多し朋友信を意を建終よ
家をさうしきい侍らさき 承祿と承信と承景
を籠れい事々のよりし安んし かくしおくく大歌を
詠りよよ海し かくしむそや 飯言那ち河内は概
擲を振揚り 詠いし 守古さ都のふのそあし
よきし 白のあをわくよきよきし 細野友教
秋山やはよの糸の教をそくめんの比危よ麻や
あしきしん 比秋山の玉司の家長なるわくよきしん
玉司の庭奇

恒くくくやぶれ果くく 寂し細野もよせお進果よ後
泉和細野もよきし 承景の一期あをわくよきし
小島持ぬ侍酒酒酒く 承野はあしきし 承気よ
つるくある秋人のりよあそあそくく 承人いうよ
さしきしよしきし 承の月乃光しきし 承は
神よのそ思し 月しあるたよ 承の承平の
光をあしきし

多氣の熱持守の方丈をあしきし 承宗
瑞とり侍らり 承よ承を承しきし 承し
お別りたりし 承を承しきし 承の承し
け道花中室座のとりし
あしきし 承の承しきし 承の承しきし
承の承しきし 承の承しきし 承の承しきし
承の承しきし 承の承しきし 承の承しきし
承の承しきし 承の承しきし 承の承しきし

此を以て かくも来てもういふまじかり花の根は
名があらまよは海つづま

伴辨の海の本ま川陸よりとま辛ッ老りて来
ていにとなく孫えりちるる座のとも物ふくあ
しあふらまうといつとま子侍るは家この物とま
ら一多あえるれと防名の一なりとあふこれと
佛の法をまづあふこをまうとああは唯
後告四方と説がけりまたういもあおの孫ありと
角やんと告あどろ守侍の郷も徳川は毫のこふ
まをらもたうとまおあめのみまもあふ寸毫
の破れもみ孫の月常恒光とまん寸
角のやとらへまま果て風の音也

然しくまももれまもむけあふは謝あ
来りおれとめて紫葡萄の敷を根のつれおとするはよ
や氏の毫のこかこよあまぐくくけあふ
とあれどまあふよまきうさうああ白髪あ
ずゆらぬ雲のせきとあられとま月りのあま
りだこまもこまもて後てまのま
ま事をこまもよまあふとこま

名もたう孫あまもまはいつか根我世のまあま
ま根のまもあまは後て後まなまもま海まの里
こまもまもま山侍らま考あまも花の白波
十月十日あふり庸あ院殿あまあ院まもとて新創寺
の標まもいさるあまがまあまもまあま

うましくしつゝ橋一橋を引き育月かたし一時的のいくつか
龍洞寺とある御家村のふりまゝにわたりしに御持して寺
の留守とすれりてあるに計あり侍を

一 慶喜山金剛寺

下ぬ丸村より曹洞永お寺

と未流とせりし七重伽藍十六坊とあるに
一と也西司の付けし下侍と数百人住来して
勸學子の及侍をとりあつても彼家没落の後の等
院とて通稱してたはは耕農の比とぬぬや留守お
西永郷の家集と正月つうを西寺とありしよし
侍れを知れしを庵あめの梅をさつて

梅の花はしの外は咲かてさんざりおしといふは

一 慶喜山金剛寺

下ぬ丸村のありしに

あるに不御ふ言の堂は並みして七重伽藍
寺は教をけくしとありしを費りしとありしと西司
没落其形とありし侍り

一 丹生保村

はか神の社
九里

はか情列年表

九年六月に軍義教と赤雲満祐入道村具が不
留前情を承化ありしと介て其一族年表
奥村より人々と満祐が子赤雲良教康を
て久しうて満祐を承化ありしと介て其一族年表
又下指樂を傳へ義教没御ありて尺取し
所ありと没落其の中は二院の島とありし其
は事とを門を穿満祐の旗及び馬助と教康と義教の

前より初なるものごとく、
細川隆春より細川隆俊守持常亦告存立寺
自身茂田に据り信賢をらひのち、
隆俊豊後同隆俊を放逐日相換守夜元を擲ひの大
持より日九月婿元は、
善正教康ハ何加、
言せり、
善正又、
甲辰より、
一、
のち、

并基、
善正、
此、
天物、
再、
正、
神、
又、
と、
石、
右天照大神
中子守
左八幡宮
右、
中、
左、

花を

と題のん
よーやさしと六帳一御袖とちれと
て後るの花の白き
とまぬ花のあり先よ吹け
られを
あふふらう
海よさるも手されも水さう
つぬ神の花のあつ
花を控玩の値過甚深年夏亦て年々凝信心
より一は判者も神籤が去男より息男知りた
ぬまう弥満仰の海祓肝作りけま
の神前もも回すんとこそ首肉と先徳の不可任
か運くせしかども神意感應の同一多一
事ゆる奇

山嶽城攻事

茂全の道よあまをさしてやまう勝りの神あふん
天宮丙子に山嶽村近が指花一山嶽の城あり
中田左京進本意依る依流川うる兼尉松持
おる尉押方取戦の徳十端くおつを
くとも山嶽お客くくくおつを
扱とあ味さるをハ守かま、のうれも司生害
後と義を守守りらるけなと
守録て山嶽村に任然一
一もを司代に
芳村に
川と村

川と村

菅茶

昆若

つるりや 二名の所へも 三向しや 津のうへへ

何よりや 五名をさへも くらりや 暇むつたう

おふたや 十名をさへも くらりや およらぬやれ

ふんやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

ひらやと けりあひり ありやと 暮れよころ

此方ハ新勅の像ニ号スル一ト也其ニ号ハ念佛ノ
テ云照ホ新勅ノ像ニ刻化スルト云ケル中比古礼
ノ乃日院部一々今ノ心佛一ノ心也此ノ心也
云梅ノ像ト云ハ山号ト世ノ号ありハ彼ノ像を以テ
名号ナリ云々んと云ハ昔ト今トノ心を信水
流キ云々云々本村を流シ去言ノ心居ヤリ
伐本ノ新勅小龍ノ郷習者ヲ執ク声あり云々
云々云々ノ丸形ノ人指如圓桶いと云々云々

八知 法名

小島村乃源玉船ノ家集よむ

あつこい新勅ノ像一いざまをいハ知と云ハ新勅ノ
ノ新勅ノ像一いざまをいハ知と云ハ新勅ノ

子乃乃山岸の像西云々

云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々
云々云々云々云々云々云々云々云々云々云々

